

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：32649

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K01851

研究課題名（和文）戦後日本の「悪書追放運動」をめぐる比較メディア史的研究

研究課題名（英文）Comparative Media Historical Study on the Campaign against Bad Books (Akusho Tsuihou Undou) in Postwar Japan

研究代表者

大尾 侑子 (OBI, YUKO)

東京経済大学・コミュニケーション学部・准教授

研究者番号：50816569

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、戦後の「悪書追放運動」がいかに姿を変えながら継続されてきたのかを比較メディア史的に分析し、通史的体系化を行うことで、1945年から現在に至るメディア文化の「有害」性にかんする社会認識や人々の活動の変遷を解明することを目的とした。2023年は兵庫県で有害環境浄化活動のフィールドワークを継続的におこない、姫路市、宝塚市、西宮市で白ポスト回収担当者へのインタビュー調査などを実施した（これらの質的調査結果は2024年4月に発行された『近代出版研究』3号に掲載した）。以上の調査によって、白ポスト発祥の地である尼崎市以外の地域における白ポスト運用状況が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来看過されがちであった「白ポスト」というメディア装置を対象として、戦後の悪書追放運動がどのように展開したのかを、歴史的な視点を中心に明らかにしたことにある。研究の結果判明したことは、母親らによる民間運動として展開したとされる白ポスト運動が、悪書追放運動を背景として、警察や行政も関わる政治的な運動としての側面を持っていたことである。また各地域でのインタビュー調査や参与観察によって、現在はインターネットを介した有害情報への接触が青少年の健全育成における喫緊の課題とみなされており、白ポストの老朽化や運用にかかる予算の都合から撤去が進んでいることが明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This study examined how the “Campaign against Bad Books (Akusho Tsuihou Undou)” developed in the postwar period, and to systematized it as a general history. Through this attempt, we aimed to elucidate the social awareness of the “harmfulness” of media culture and the reality of people's activities from 1945 to the present. First, in 2023, we continued fieldwork on “toxic environment cleanup activities” in Hyogo Prefecture, Japan. Specifically, interviews were conducted in Himeji City, Takarazuka City, and Nishinomiya City with people who manage the White Post Box (SHIRO POST). The results of these surveys were published in Kindai Shuppan Kenkyu (Journal of Modern Publishing) No.3, April 2024. The above surveys revealed the status of white post operations not only in Amagasaki City, the birthplace of white post, but also in adjacent areas.

研究分野：社会学

キーワード：メディア史 歴史社会学 悪書追放運動 白ポスト 有害環境浄化活動 有害図書

1. 研究開始当初の背景

2018年から経済産業省が推進する「DX」や国土交通省が推進する「スマートシティ構想」の議論が活発化している。DXの根幹には「進化するデジタル技術の進展によって人間の生活をより向上させる」という理念、そして既存の価値観や思考の枠組みを刷新する革新性への期待が込められている。

しかし、メディア技術と人間の共存共栄にかんするビジョンが喧伝される一方で、その技術や文化をめぐる「有害」性に警鐘を鳴らす議論も根強く存在しつづけている。たとえば、2020年の東京オリンピックを控えたコンビニ各社による「成人向け雑誌」の販売停止の決定、香川県の「ゲーム規制(ゲームは1日60分まで)」も物議を醸した。

また1960年代以降から、一部の都道府県では「有害図書類」という言葉で書籍や雑誌、VHS、DVD、ゲーム等の回収運動が行われている(=白ポスト運動)。こうした対象については法学的研究(曾我部 2012ほか)やマンガ・ジャーナリズム史研究(橋本 2002; 長岡 2010; 竹内 1995)に蓄積があるものの、「有害」なメディアの固有性(モノとしての性質)が前提とされており、人々の活動や実践を通じて「有害」概念が実行されていく様は不透明である。

また社会学領野では、構築主義的アプローチによるレトリック分析やディベート研究等(中河・永井 1993; 佐藤 2016)の成果が存在するが、他の時間・空間との比較や、テキスト(上のレトリック)ではなく現場における身体的実践の水準は論じられてこなかった。

2. 研究の目的

そこで本研究は戦後日本の「悪書追放運動」を広義に捉え、同運動が戦後の国際的コンテクストとの影響関係のもといかにして遂行され、また現今の「有害環境浄化活動」(白ポスト運動)へと結びついてきたのかを、研究の核心をなす学術的「問い」に設定する。以上の「問い」を受けて、本研究は戦後の「悪書追放運動」がいかに姿を変えながら継続されてきたのかを比較メディア史的に分析し、通史的体系化を行うことで、1945年から現在に至るメディア文化の「有害」性にかんする社会認識や人々の活動の変遷を解明することを目的とする。

3. 研究の方法

これまで同運動にかんする研究には、条例を分析する【A】法学的研究、マンガバッシングの歴史を追った【B】マンガ研究、【C】社会学領野における構築主義的アプローチによるレトリック分析など多方面で優れた蓄積があるが、先行研究はいずれも「悪書」や「有害」とみなされるメディアの固有性(=成人雑誌、成人向け漫画、DVD等)を前提としており、そもそもこれらのメディアが置かれている場所や関与するヒトの相互作用のなかでこそ、社会的な位相や意味が規定される点が考慮されていないという課題がある。

ここで「メディア」を「私たちの生きる社会的世界の技術論的な次元と意味論的な次元を媒介しながら、このような個別のメディアの布置や編制を可能にしていく、より全体的な構造連関の社会的な場のことを指している」(吉見・水越 1997: 11)と捉えるのであれば、「悪書/有害図書」を個別媒体の特殊性においてではなく、「むしろそれらの個別性を可能にしている社会的な場の力学」(吉見 2012: 3)において捉える必要があるだろう。そこで、本研究は【D】比較メディア史的な分析枠組みを採用し、これにフィールドワークによる現状把握の成果を組み合わせることで、先行研究【B】と【C】を発展的に昇華させることとする。

4. 研究成果

上記の目的、方法に基づき 2023 年は兵庫県尼崎市における白ポスト運動の始まりに関する新聞記事データの種集、および有害環境浄化活動のフィールドワークを継続的におこなった。具体的には姫路市、宝塚市、西宮市で白ポスト回収担当者へのインタビュー調査を実施した(これらの質的調査結果は 2024 年 4 月に発行された『近代出版

研究』3号に掲載した)。研究の結果判明したことは、母親らによる民間運動として展開したとされる白ポスト運動が、悪書追放運動を背景として、警察や行政も関わる政治的な運動としての側面を持っていたことである。

また各地域でのインタビュー調査や参与観察によって、現在はインターネットを介した有害情報への接触が青少年の健全育成における喫緊の課題とみなされており、白ポストの老朽化や運用にかかる予算の都合から撤去が進んでいることが明らかとなった。本研究の意義は、従来看過されがちであった「白ポスト」というメディア装置を対象として、戦後の悪書追放運動がどのように展開したのかを、歴史的な視点を中心に明らかにした点にある。今後は以上の調査結果を含めて論文執筆をおこない、さらに詳細な研究結果を公表する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 大尾 侑子	4. 巻 52
2. 論文標題 「直筆原稿」のメディア論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 出版研究	6. 最初と最後の頁 47～70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24756/jshuppan.52.0_47	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大尾 侑子	4. 巻 100
2. 論文標題 「白ポスト」はいかに“使われた”か？	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 マス・コミュニケーション研究	6. 最初と最後の頁 143～162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24460/mscom.100.0_143	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 大尾侑子
2. 発表標題 ワークショップ5「博論を本にする：メディア史の場合」
3. 学会等名 日本メディア学会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大尾侑子
2. 発表標題 “Quit Being a Fan” “あがる/担降り/ペン卒/推し変”（Room7:「ファンカルチャーにみる 移動/連鎖/離脱」）
3. 学会等名 カルチュラル・スタディーズ学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大尾侑子
2. 発表標題 「内容見本」というメディア 戦前昭和の軟派出版におけるパンフレットの機能
3. 学会等名 20世紀メディア研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大尾侑子
2. 発表標題 「俗悪と洗練の境界 エロ・グロ・ナンセンス前夜の地下出版」(基調講演)
3. 学会等名 大正イマジユリィ学会(招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 大尾侑子
2. 発表標題 ヒロボンと不良出版 1950年代の悪書追放運動における「悪書」の“発見”
3. 学会等名 日本社会学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大尾侑子
2. 発表標題 「雑誌」研究の可能性 戦前昭和の地下出版メディアから問う
3. 学会等名 日本マス・コミュニケーション学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大尾侑子
2. 発表標題 「戦後の有害環境浄化に関する研究」
3. 学会等名 モノメディア研究会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 大尾侑子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 金沢文圃閣	5. 総ページ数 1040
3. 書名 『斎藤昌三編集『おいら』『いもづる』 郷土研究的趣味雑誌の1920～1941年』（全三巻・別巻）	

1. 著者名 日本出版学会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 印刷学会出版部	5. 総ページ数 256
3. 書名 パブリッシング・スタディーズ	

1. 著者名 大尾侑子 担当箇所第9章 ファンの「心の管理」 ジャニーズJr.ファンの実践にみるファンの「感情管理/感情労働」	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 224
3. 書名 田島 悠来（編）『アイドル・スタディーズ』	

1. 著者名 大尾侑子 第2章「聴衆／ファン」	4. 発行年 2023年
2. 出版社 フィルムアート社	5. 総ページ数 264
3. 書名 永富真梨、忠聡太、日高良祐（編）クリティカル・ワード ポピュラー音楽	

1. 著者名 大尾侑子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 496
3. 書名 地下出版のメディア史 エロ・グロ、珍書屋、教養主義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------